

## 「ここにいるおと」

2009/10/18

夜になればすべてを溶かし込める。

朝になれば思い出してしまふ、気恥ずかしさや互いの立場、葛藤に不安に疑念に躊躇い。

素直な気持ちだけ残ればいいと、この暗闇にきつと二人とも思っている。

僕はもしかしたら、と、そこまで言って妹子が口を閉ざした。さらさらと大して長くもない私の髪を手遊びに、しばらく沈黙が続く。

私はこの先を聞くべきかどうかを真剣に悩もうとして、しかしすぐに飽きてしまった。

難しいことは嫌いだ。悲しいことなら尚更で、どうしたらこの子をそういつた不安から守ってやれるんだろうといつも悩んで、止めてしまふ。

己の無力さを突きつけられるのは好きじゃない。

だから閉じていた目を開いて寝転がったまま妹子を見上げた。私の傍らに座った妹子は私を見てはいなかった。どこか遠くを見つめている。窓の外とかわらうか。どうせ暗いだけで何もないというのに。それとも月でも見えているのだろうか。

そういったことを想像するのにも飽きてしまい、一向に私を見ようとしないうちに痺れを切らす。

しばらくそのままじつとした後に、急に身体を起こして妹子に抱きついた。

「なんだよ？」

「え？ うわあ！！」

何も考えてない風にふざけた声で言っ、そのまま妹子に覆い被さった。

ぼんやりとしていた妹子はそんな私の行動を読めなかったよう、上擦った声をあげて簡単に私に押し倒された。

あ、頭打ったかもしれない。手を添えてあげるのを忘れた。まあいいか、そのまま、余計なこと忘れてくれたらいいな。

「なに、するんですか！」

「すまーん」

へらへら笑つてぐつと顔を近づける。鼻と鼻が掠める距離。肩を押さえつけて、逃げられないように。

じつとのぞき込んだ目は動揺してゐたいに細かく動いて、最後にはぎゅつと脛を閉じてしまった。つまらん。

「……………近いです」

「そう？」

妹子が目を閉じたまま、囁くみたいにして言う。私は少しだけ伸び上がって、ちゅ、と音を立てておでこにキスした。ぎゅつと目元と肩に力がこもった。

かわいい。かわいくて、ついからかってやりたくなる。

だからその目元にもキスして、妹子が目を閉じたままだったから今度は頬にキスして、鼻の頭にキスして、今度は耳元に唇を寄せる。

ちゅ、と触れていくだけの、じゃれあうみたいなキスなのにいちいちびくりと妹子が反応してくれるのがうれしくてたまらない気持ちになる。

頬をすり合わせて、妹子の耳元で話しかける。

「ね、今、私が何したいかわかる？」

「……………」

妹子が何も答えてくれないから、そのままちょうどいい位置にある耳たぶをかぷりとくわえた。

息を呑む音がして、でも声は聞けなかった。ちよつと残念。くわえたままくすぐす笑う。

「あ、あのつ……………」

「していい？」

焦つたみたいに妹子が何かを言いかける。

私はそつと身体を離して、またじつと妹子を見つめてる。

おそろおそろといった風に妹子が目を開いた。にこにこ楽しい気分では妹子の返事を待つ。

妹子の視線がふらふらと泳いでいて、かわいい。ちよつとずつ赤くなつてくほつべたとか、それ以上に熱そうな耳たぶとか、困つたみたいにきゅつと下がった眉とか、もう、ぜんぶぜんぶかわいい。

「はい……………」

本当にか細い声で、かすれるような声だったから緊張しているのが丸わかりだ。またすぐに目を閉じちゃうし。

もう本当に、どうしようもないくらい、かわいい子だ。

「じゃあ、するよ」

ちよつと声に真剣みを持たせて、でも妹子には私が見えていないのをいいことにこみ上げてくる笑いは隠さなかった

相手を見ないからからかわれるんだよなんて心の中だけで教えてあげて、私は妹子の心臓の上に片耳を押し当てた。

最初に感じたのは体温の高さ。それから、鼓動の早さ。

生きてるんだなあって思った。ここにこの子はいるんだって。そんな、当たり前のことに胸がいっぱいになる。

思わず泣きたいくらいに確かな音に、つられて私もどきどきした。

苦しくて苦しくて幸せで、思わずため息が出た。

「た、太子？」

慌てたような戸惑っているような声は右と左で聞こえ方が違った。空気を震わせて伝わる音と、身体の中で響く音と。

じつとこの子の生きている音を聞いた。

この音の速さが恋だったら、それならもう私は他にになんにもいらない。

権力だって身分だって、きっとこの国だって捨ててしまえるような気がしている。

そんなことはきっと、この子が許してくれないんだろううけど。

「あのおつ」

「なに？」

「……………その、」

いったん目を閉じて気持ち冷ました。そつと頭を上げて代わり手のひらを当てた。じつと手のひらを、心臓の位置を見下ろした。

とんとんと、やっぱり伝わってくる妹子の音。

こみ上げてくる笑いも抑えて極力何も考えていない顔で妹子を見たら、妹子はとても困ったような顔をしていた。すごい真つ赤で沸騰しそうだ。

かわいい。

「どうした？ 妹子は、何をされると思ったの？」

「……………」

ああダメだよっぱり笑ってしまふ。

そんな非難がましい目で見られたって困るよ。

「お前は どうして ほしかつたの？」

照れ隠しのような、怒った表情がふい、と横を向く。

ちよつとからかいすぎたかなあと少しだけ反省して、もう一度伸び上がってれる、と口元を舐めてみた。

ひや、とかわいい声が聞けた。

「わ、わかってるんでしょう！？」

「んー、だって私バカだし？」

「あんた最低だ！」

「わかっているけど、きちんと言っただけでほしいんだよ、私は」

手のひらをびたりとほっぺたに添えた。あつたかくて柔らかに、赤くてかわい。

言葉に出来ない、する必要なんか無い。楽しいとかうれいとか幸せとか、言葉にしてしまえばこんなに簡単だけど、それよりもっと胸がいつぱいになってしまふような感情で満たされて笑う。

妹子が目を伏せた。私は最初に、妹子があきらめられた言葉は何だったんだろうかと今更思い返した。

わかるわけがないんだよ。私はバカだから、言ってもらわないとわからない。

悲しいこと辛いこと怖いこと、何からだって守ってあげたい。この子には何だかってしてあげたい。

それでも私はこの子のこと、まだ知らないことばかりだから、悲しいこと辛いこと怖いこと、そしてしてほしいことならかわからない。だからいつそ苦しくたって、ただひたすら手を伸ばしているだけだ。

それでこの子を守れるとも、これが正しいことだとも信じることはできない。

それでも一番大切なものは間違わないし、欲しいものをためらいたくはない。

最後に私は、ただそれだけの話なのだ結論付ける。

不確定な要素が多いのなら、大事なものは私がどうしたいかで私はこの子を大切にしたい。

こんなに強く思うのに、どうしてそれだけのことがきちんと伝えられないのかって、いつでも悩んでばかりだけど。

「ね、だから、言っただけ。ちゃんと」

そう、私は妹子にお願いをする。

妹子はきよるきよるとあちこちに視線を彷徨させた。肩間にしわを寄せて嫌々という風に、物凄く恥ずかしいみたいに、すぐく小さな声で囁くように何事かを呟く。

「……………してください」

「え？」

意地悪とかではなくて本当に聞き取れなくて、ちよつと妹子に顔を近づけた。

怒ったような顔に強く睨みつけられてさすがにたじろいだら、突然妹子にぎゅうと抱き寄せられた。

びっくりしたけど、そのままじゃ妹子にぶつかると思っただけにひじを付いて身体を支えた。

そんなこちらの苦労なんか知らない妹子の手のひらが、首筋をたどり私の頭を探り抱え込む。そうしてぐいと引き寄せられる。

その余裕のない仕草と表情に仕方ないなと思いつつ、うれ

しくなって、キスをした。

何回か唇を重ねて、それからもったいぶるように舌を差し入れて。

角度を変えながら食べるように深く口内を味わった。わいた唾液をすり付けるように舌を捕まえて舐め上げる。

呼吸が苦しくなってようやくやく、息継ぎに少し唇を離すと相変わらず赤い顔がぼうつとしていた。ひいた糸はすぐにふつりと切れて落ちてしまいそれを無性にさみしく思うけれど、見つめてくる目がのぼせたように潤んでいてわけもわからず泣き出しなくなる。

そんな格好悪いところなんか見られたくなくて、ぐ、と喉の奥に力をこめてその衝動を耐えた。

声は震えたかもしれない。

「私は、好きだからな。お前が。だから離さない。譲らない。お前が何て言ったって、どこに行ったって、逃がさないからな」

妹子がきゅ、と眉を下げた。困ったような、もしかしたら今の私と同じように泣きたいような、そんな表情。

「……………なんですか、突然……………ストーカー宣言、ですか？」

「……………人がせっかく告白してんのに、失礼なやつだな」

あえて不機嫌に見えるように言ってみる。

だけどそんな作った表情、胸をいっばいにする想いの前にはすぐに剥がれ落ちてしまう。

しかたなく、笑う。

泣きたくないからかわりに笑う。

「でも、それでもいい。例えお前が私のこと嫌いになっても、そしたらまた、片想いからやり直す」

だから。

「ずっと好きでいさせろよな」

妹子が何かを言いたそうだったけれど、もう一秒だつて待たなくてまた、唇を合わせた。

想うことも、伝いたいことも、このまま全部妹子に流れていけばいいのにと甘えた考えを抱く。

心臓に当てた手のひらに響く音が私と同じ想いであればいい。

疑り深い私のために、いつか、きちんと話して聞かせてほしい。

贅沢な願いと知りつつも、そう、考えずにはいられなかった。

## 「途中の約束」

2009/10/25

好きって言ってしまったのは半分事故みたいなものだった。昔話の中に僕がいないのが何となくつまらない、そんなことを考えていた。

酒の席だった。ちなみに僕から誘ったわけではない。太子がもらったと上機嫌に持ってきた酒で、強引に僕の家の上がり込まれてなんだかなしくずし的に一緒に飲むことになってしまったのだ。

太子の上機嫌もよくわかる、僕なんか飲んだことのないくらい、それは上等な酒だった。

それに比例してわりと強く、太子も僕も、同じくらいに酔っていた。

何のきつかけでか太子の昔話を聞いていた。いつ誰とどこでどうしたか、政に絡みそうな部分も関係なしにしゃべりそうになるものだからあわてて止めなければいけなかった。余計なことを知ってしまうのは面倒でこめんだ。

太子の話は興味深くてもおもしろかったけれど、そこに僕がいないことがほんの少しだけ不機嫌の元になっていた。当たり前と言えば当たり前、だって僕らはこの間、共に隋に行っただけなのだ。いっしょに隋に行ったことだって今考えてみれば嘘みたいな話だ。今、目の前に吞んだくれて酔っばらっている太子がいなければ嘘にしてしまえそうなくらい、あり得ない話でもあった。

それを幸運と言えばいいのか不運と言えばいいのかはわからないけれども、そこから太子とのつきあいが始まったのは確かだ。

期間が短すぎる。昔話に、僕がいないのは当然だった。

それでもなんだか苛立った。

楽しそうに他人の話をするのが、だんだんつまらなく感じている。

僕だけこんな風にぐるぐると、不機嫌や自分でもうまく把握できないよくわからない感情を持て余しているのは不公平に思えた。

「でさー、あいつその時なんて言ったと思う？ 聞けよ聞けよ」

「太子」

「えっと、なんだっけなー。……………え、何なに？」

「好きです」

驚かしてやりたかった。上機嫌なその表情を、一瞬でも崩

すことができれば勝ちだと思った。

太子だって赤い顔をして、この人今日一人で帰れるのかな、なんか途中で行き倒れそうだな、とか思わせるほどだったけれども、僕だってきつと同じくらい、下手するとそれ以上に酔っていた。

「……………え？」

「好き、です」

耳がごわごわするのは自分の血の流れる音かな。それが急に大きくなって、顔が熱くなって、頭がくらくらする。

きちんと座っているのも面倒なくらい頭が重く感じて、まあいいかとか何がいいのかさっぱりわからない投げやりさで机の上にごつ倒れた。

ひどい音を立てて、額をぶつけた。

さすがに、痛い。思考が白む。

でもその衝撃が気持ち良くなってすつとした。

「ちよ、お芋？ 壊れたか？」

わたわたとした声。机に突っ伏したまま少し横を向くと心配そうにのぞき込んでくる太子の顔がすぐそばに。

困って下がった眉が、酔いに潤んだように見える瞳が、上気した頬が、本当に心配そうに僕をのぞき込んでくる。

くらくらする頭を貫くように強く、鋭く思った。

好きだ。

理由なんか、後からいくらだって用意するから。

「え？」

手を伸ばせば触れられてしまった。

体を起こせば、少しだけ腰を浮かせば、机越しの距離、容易く越えられてしまう。

なんて簡単なんだろうと目をつむりながら思った。

そのとき太子がどんな顔をしたかなんか知らない。

触れた唇はかさついていたからそつとなめると、酒の甘みがふわりと香る。

僕はうっとり微笑んだと思う。

内側は濡れていて同じ甘さで、舌先をうごめかせて食った。とん、と肩がたたかれる。

とんとんと、押し退けるように、その力がだんだん強くなる。

抱きしめるには机は邪魔で、肩をつかまれて仕方なく唇を離した。

名残惜しくて最後に一度、離れ際にちろりとなめたら太子は口元を手で隠してばつと後ずさった。

何となく傷ついた気持ちになって、すつと目を細くする。びくりと太子が身を震わせた。

その怯えたような表情とか、なんか小動物か何かみたいだ。相変わらず顔は赤い。いつもより水分が多いような目に犬

を連想した。

「逃げないでください……………」

「ちよ、こ、こつちくるなよ!？」

もうひたすらに頭が重くて、立ち上がろうとしてできなかった。うずくまる。ぐらぐらと、頭というよりももう足下の床から揺れているような感じでどうしようもない。

「ちよつと、お前大丈夫か?」

肩に乗せられた手を、顔を上げることができないままに掴んだ。

相変わらず頭はぐらぐらするけれど、そんなことはどうでもいい。今はこの人を離したくなくって何にも考えないでとりあえず抱き寄せた。

「何なんだよせつかく心配してやってんのに!!!」

じたばたと腕の中で暴れる体を抱き込む。

もう目も開けていられない。

座り込んで手探りで太子を抱きしめたまま、鼻先を太子の首筋にすり寄せて深く息を吸った。

相変わらずハーブの香りなんかしやしない。けれど嗅ぎなれたにおいにそれだけでどうしてか、どうしようもなくやわ

らぐ気持ちに、腕の力を強くする。  
吐き出した息はとても熱かった。

「……………苦しい」

「……………すみません」

「お前、ちつとも悪いと思っちゃいないだろ……………」

「好きです」

「だから」

言うなつて、もう。

いやに神妙な声が苦笑する。

そつと回された手のひらに背中をなでられて、気がついたら目から水が馬鹿みたいにたくさん出た。

目を太子の肩口に押しつける。青いジャージはあまり水を吸い込まない。それでもさらに濃い色に変えて涙は僕からあなたに移る。

どうして自分は泣いているのだろうか、自分の気持ちもう分からなくてただ呆然と涙をジャージに染み込ませた。

鼻水はつけるなよと太子がからかってくる。

「なんだよお前、めんどくさい酔い方して」

「酔ってませんよ僕は」

「お子様め、第一睦言は、酒の席で言うものじゃないよ」

「返事は……………」



「酒の席での言葉は信じないことにしてるんだ」

ごめんな、と囁くように言われて途端に呼吸が苦しくなった。引き絞るように心臓が痛む。急にどうしたんだらうかと僕はうろたえてしまう。

「冗談なんだから………？ そんな顔をするなよ」

見えていないくせに勝手なことを言うなよと言いたかった。もうずっと僕は太子の肩に額を押しつけて顔が上げられない。

冗談。そう、ただの戯れでいたずらだ。太子の驚く様が見たかった。

………この痛みは何だろう。

また深く、息を吸い込む。

ぼんぼん、と背中をなでられる。

ぼん、ぼん、といつの間にかひどく早い心臓の音を、なだめるような拍の取り方に、ただでさえ重たい頭が眠りたがる。このまま眠ってしまえたらきつと気持ちいい。

だけど同時に寝てしまうのはなんだかもったいない気がする。

むずかるようにぐりぐりとゆるく首を振って、顔を上げようとしたら優しく頭を抱き込まれた。

太子がどんな顔をしているのか、僕にはわからない。

「そうだな、じゃあ、もしも明日、きちんと覚えていられたら………」

全部を聞く前にふつりと音が途切れて、もう何も考えられない。

何かを一生懸命覚えていようと思ったのに、きっと僕は、明日になればその大切なはずの何かを忘れているのだらう。そんな漠然とした不安だけが胸に広がって、ぼん、ぼん、と背中をなでてくれる音にすがりついた。

「夕暮れ色の  
半分を」

2009/11/15

死にかけのような色のくせに、強く差し込んで目を痛くする。

夕日、夕焼け、染まる空。

そんなもの、正直好きじゃない。

何よりその色がいけない。

気が、滅入る。

今日も気が済むまではしゃぎ尽くして、気を抜いていたらすっかり時間が経っていて夕方だった。

ちよつと夢中になりすぎたかもしれない。

だつて今日は妹子が歩いていっしょだったからつい、うれしくて少し前を妹子が歩いている。ぶつぶつと何か文句を言っているけれど、その男が今日一日私につきあってくれていたのだと思うと気分がぼうつと浮かれてくる。

その気持ちに水を差すように、遠く、半分以上山に隠れた日が赤く熟れた光を目に差した。

引きずられて重く沈みそうになる気持ちをごまかしたくて、はしゃいだ声を赤いジャージの背中に投げた。

いかにも面倒くさそうな表情で振り返られる。

眉が不機嫌にしかめられていて、苦笑した。

やさしくない、私に媚びない、その態度が好ましい。

そんな妹子の輪郭を赤く縁取る遠くの日差し。

ずっと蹴飛ばしてきた小石が跳ねて草むらに消えた。

あ、ジョセフが消えた探せ妹子！ と、そんな風に騒いでもせて草の間をかき分けた。

私の声に振り返った妹子はまあ何というか予想通り、バカにたようなあきれたような、そんな顔で私を見ている。

「何がジョセフですか。そのへんの石ころに一々名前付けないでくださいよ。どうせ最後には川に投げるんですよ」

「違うよ。ちゃんと家まで連れて帰れたら庭の隅に並べるんだもんね。現在16個！」

「集めてんの！？」

大げさに驚いた妹子が腰に手を当ててやれやれとため息を

ついでに。

草の間を探す私の腕を取って、あきらめてください、と道に引き戻そうとしてくる。

妹子を振り返り、その輪郭を染める色を見た。

ふつと脳裏に浮かびそうになる絵を払うのに必死で抵抗できなかつた。

夕日の色は赤い。

私の顔をじつと睨む、妹子も同じ色に染まっている。

その頬の下にも同じ色が流れている。

今私はうまく笑えているだろうか。

そんなことを気にするとますます表情がぎこちなくなる。

感情が、錆付いたみたいに軋み出す。

これだから夕方は嫌いなのだ。

連想するのは良くないものばかり。

例えば血の色。例えば火の色。

私が嫌いで遠ざけた、醜い争いの象徴ばかりをいちいち律儀に思い出す。

心が、重い。

沈んで行くことのできる場所はどこにもなくせに、ただ重苦しい引力を感じて何もかもが億劫になる。

とつさに言葉が浮かばなくて私たちの間に沈黙が生じた。

妹子が片眉を上げて不思議そうな顔をする。一見気の抜けた表情が、たちまち心配そうに私をのぞきこむ。

こいつはやさしい男なのだと改めて思い知る。でも、その気遣いが今は煩わしい。

払いのけたくて、そのためには何か冗談のひとつでも言うてこの男を呆れさせればいいのに、いつもは簡単なそれだけの事が今は無性に難しい。

何かを言わないと、と思えば思うほど言葉は遠ざかる。

ふざけて、茶化して、馬鹿を演じたのに突然にそれができなくなる。

顔をしかめてしまわないように、せめて無表情を取り繕うので精一杯だった。

何も言い出せないままじつと妹子を見る。

停滞してしまった空気をどうしたらいいのか悩んでいるうちに、ふいと妹子が首をひねって後ろを向いた。

沈黙の上にああ、とやわらかい声が落とされた。

夕日、きれいですね。

一瞬、私は耳を疑った。

びっくりして思わず妹子の横顔を見つめる。

眩しいのかそっと目を細めて沈みかけの日を眺めている。眩しい横顔が静かに微笑んでいて、この世のどんなものより

も、何よりも尊いもののように思えて、見とれた。

この男は自分とは違うのだと強く思い知る。  
思い知って思い知らされて。

苦しくはないと言ったら嘘になるはずだ。

それでもこの夕日をきれいだと呟いてわずかに口元に笑みをのせる、そんな表情に苦しいとかそういう感情よりも強く、どうしようもなく胸の奥が焦がれた。

欲しいな、と単純に思った。

その表情が私は、欲しい。

「そうだな」

努めてやわらかく口角を吊り上げて、何とかそう口にした。  
嘘でも良かった。

本当になればいいと思った。

昔は素直に好きだと、きれいだと、この時間を笑って過ごしていられただろうか。

そんなことを思い出そうとしても現実味がなくて、なんだかぼんやりしてしまう。

だけど思い出させて欲しいと思った。

お前が笑って指さして、あれ、と教えてくれるなら、もう

一度取り戻せる気がする。

きれいなもの、一つ一つ、指差して教えてくれるなら私にも何度だって取り戻せる。

そう、信じてみたくなった。

妹子は私の手首を掴んだままだった。

期待をこめて腕をひいた。腕を振って歩き出した。  
手のひらは離れていかなかった。

「帰る！ また、明日もいっしょに遊ぶんだぞ！」

「ええー」

「ちよ、何だよその返事は！ やる気ゼロ!？」

「仕事しろって意味だよ！ やる気ゼロなのはそっちでしよう？」

「……………そんなことは、ない！」

「その間は何だ！」

下らないことを話す。内容なんかまるでないようなやり取り。

でもそれが、どうしようもなく楽しくて自然に笑う。

怒る妹子の口元も心なしかゆるんでいるから、私はどこまでも自惚れることができる。

その妹子の向こう側にはもういつの間にか見えなく

なっていたけれど、残りかすみたいな光が未だに空の半分を染めていた。

振り返れば空のもう半分、反対側では夜が始まっている。右と左で色合いの違う、へんてこな空の下をぶらぶらと腕を揺らして二人で帰る。

もう少ししたら星が出る、夜になる。

その星のひとつひとつをこの男は、指差してまた笑うかもしれない。

想像するだけで何だかじんわり気持ちいがほぐれて、今日じやなくてもいいからいつか、いつしよに星空が見たくなった。

「元気のもと  
愛のもと」

2009/11/21

「これを昼過ぎまでに……………」 「あとこっちは今日中に……………」

容赦なく追加されていく書類束を、よくもまあこんなに用意できるものだと思れ半分に感心しつつ、そんな思いは欠片も表情に出さずに抱えて部屋を辞した。

「あれが噂の……………」 「どんな人物かと思っていたが……………」  
……………」 「まだ若造じゃないか……………」 「しかし冠位は……………」  
……………」

聞こえてんだよ。  
声に出さないうで呟いて、さっさとその場を後にした。

僕の所属するところよりも上の別の部署に呼び付けられた。何事かと思えば言いつけられたのはただの書類仕事だ。

ただし量が多い。わざと余計な仕事を押しつけられているのは明確で、気付かない振りをしてすべて受け取ってきた。

嫌がらせの一種らしい。そこに僕の実力をはかるため、という言い分が上乘せされたりするけれどもどうでもいい。

最近こういうことが増えた。同僚は苦笑しつつ気付かない振りをする。僕も気付かない振りをする。

人の悪意なんか見ない方がいいに決まっている。こうやって積み上げられた仕事はたとえきつくてもすべて期限を守って提出することに決めている。過剰量の仕事でも

こなせば成果。どうせ相手に利用されるだけで僕の評価になることはあり得ない。わかっているにもかかわらずどうにかそう信じ込む

ことにしている。

全部全部自分の為。  
それ以上は気にしないことが一番だ。

「それにしても、だよ」

多過ぎる。

連日続けばさすがに参る。

おまけに最近よく眠れていなかった。頭が重い。

それでも弱音を吐くのは負けたような気がして何か嫌だ。盛大に息を吐いて机に抱えてきた書類を積んだ。

効率化のためにまず提出期限と処理の難易度で適当に仕分けて、いったん机の上からどかしていく。

機械的に手を動かしながら今日の時間配分を大雑把に考える。

「無限に広がる大宇宙―」

「だからそれ、挨拶じゃないですから」

めんどくさいので無視したい人物ナンバーワンの登場に頭の重みが増した気がした。厄日か。そんなこと言ったら毎日が厄日なので認めたくはない。

吐き出したため息はかたかった。

今日は、だめだ。こいつを相手にするだけの元気が足りない。

黙々と動かす手を止めずに、太子を振り返りもしないで無言をつらぬく。

これであきらめて帰ってくれるなら僕はいつでも楽だし、まああり得ないことではあるけれどたとえ効果がなくともとりあえず態度を明確にしておく必要はあるはずだ。

どんだんと無遠慮な足音で、かたわらに避けた書類が崩れてしまう気がしてうんざりした。

太子が机の正面に回ってくる。

僕はそれでも太子を無視して書類を仕分ける。

このまま僕に飽きて帰ってくれ、と願う中、すいと指先が伸ばされて僕の目元に触れた。

突然視界に入ってきた太子の手にびっくりして、思わず少し身を引いてしまった。

指先は目の下をこするように動いて、すぐに離れていく。

「ふうん」

太子がつまらなそうに呟いたけれども僕にはその意味が分からなかった。

それから一転、気の抜けた顔で何がそんなに楽しいのか朗らかに笑いかけられた。

いたずらを思いついたときの表情だと気付いてつつい身構える。

「聞け妹子。私手品覚えたんだぞ！」

聞きたくないかった。どうせきつとろくでもないことをやらかすから。

それでもちやうど机の上が片付いてしまい、そこに両肘をのせてこつち側に身を乗り出されてしまっはもうこれ以上無視し続けることも難しい。

「右のポッケには元気のもと、左のポッケには愛のもと―」

「はあ」

変な歌を歌い出すし。早くどっか行ってくれないかなあと  
気持ちりがぼんやりする。

太子はジャージの右のポケットから何かを取り出した。

手のひらを開いて見せてくる。丸い、派手な包みのあめ玉  
だった。

それをまた右手に握り込み、グーにした左手と一緒に突き  
出した。

「さあ、どっちだ？」

「右でしょう」

考えるまでもない。それなら、体の後ろにいったん手を隠  
さないという意味ないんじゃないか。

「本当に？」

にや、と腹が立つほど不敵に太子が笑い、もったいぶるよ  
うにゆつくりと両方いっぺんに手が開かれた。

「……………え？」

「ぶつぶー。はい、妹子、残念だったな！」

目の前で握り込まれたはずのあめ玉はどっちの手のひらに

もなかった。

思わず開かれた太子の手を取って、裏返したり軽くたたいて  
みたり、ついでに袖の中まで確認してしまったけれど、ど  
こにもない。

にやにやと得意げな太子の顔がムカつく。

不機嫌が顔に出たのか余計に笑われた。

心底楽しげに頬杖ついて太子は笑い、ひらりと手をひらめ  
かす。

「私の歌を聞いてたか？ 元気は、右のポケットだよ」

手のひらで示されているのは僕だった。

思わず手を突っ込んだら、指先が固いものに触れた。

おそるおそる引っぱり出す。

出てきたのは派手な包みのあめ玉だった。

ぼかんと、きつと間の抜けた顔で僕は太子を見た。

本当に機嫌が良さそうに太子が笑う。

「あげる。だから、元気出せよ」

とん、と眉間をつつかれて目をつむった。

痛くてさすり、睨んだのを気にもしないで太子は立ち上が  
る。

「これ、竹中さんにも自慢してくる！」



そして来たときと同じ唐突さで、大きな足音をと共にさつさといなくなってしまう。

静かになった部屋でぼかんと、間抜けに呆然としてからはつとする。

嵐みたいなやつめと苦く思っつて、とりあえずまた書類をまじめなおしてまず一番上から手をつけた。

あめ玉は机のすみにいったん保留だ。

書類に向かいつつ筆を走らせつつ、さっきの手の品の種を、解き明かそうと思考がもつれる。

なかなかわからないのが悔しくて一度筆を転がして仰向けに倒れた。

天井が遠い。

何となく手を伸ばして、グーとパーを繰り返す。

握り込んだあめ玉が消えたのもわからなければ、僕のポケットに入っていたのもわからなかった。

そこでふと最初の変な歌を思い出した。

右には元気で、じゃあ左は何だったか。

左のポケットに上から触れる。

固い感触があつてびつくりして体を起こした。

ポケットに手をつ突つ込む。やはり、何かが入っている。

ゆっくり丁寧に取り出してみると、それはふたつに折り畳まれた紙切れだった。

開くと、見慣れたひよろひよろとした文字でたった一言がなれば、と。

「言われなくても」

意地のように仕事にしがみつくのは上を目指しているからだ。

最初はこれでもいいかと思つていた。あんたが上司で、僕が部下で。

でも見上げるのはもう飽きた。

同じ高さでものを見たい。

ばん、と両手で頬をたたくて気合いを入れた。

あめ玉の派手な包みをむいて口に放り込んだ。

さらりとまた筆を紙の上に滑らせて、舌の上に甘さを転がした。

「せいぜい覚悟  
すればいい」

2009/12/20

ああこれは夢なんだ。

って、本当は最初からわかっていたのに、僕はいつまでも泣き止むことが出来なかった。

夢とわかっているのに胸が痛い。まるで張り裂けてしまいうるに。

辛くて辛くてたまらなくて、幼い僕はわんわんと、声を上げて泣いていた。

僕は何かを失くしてしまっただけらしい。

悲しくて悲しくてたまらなくて泣き続けていた。だから我慢できずに声を上げて泣いていて、息が苦しく乱れていく。

その苦しさがゆるりと誰かに背中を撫でられた途端に、す

うっと、やわらいで僕は驚いた。

驚きで涙が引つ込んで、僕は呆然と後ろを振り向いた。

そこにはお面で顔を隠した人がいて、わずかに膝を曲げゆるりと僕の背中を撫でてくれた。

どうしたのって、お面越し、くぐもった声が聞いてくる。失くし物をしたのだと、そう答えればいっしょに探そうとその人が言う。

差し出された手のひらは骨ばって大きな大人のものだった。手を繋いだら張り裂けるような胸の痛みが不思議と和らいだ気がした。

ゆっくりと立ち上がる。

その人の表情はわからなかったけれども、行こう、と真つ直ぐに前を指差した。

僕は頷く。

そのまま探し物をするために、僕らは二人で歩き出した。

頭の片隅に何かが引っかかっている。

それが何か判然としないまま、繋いだあたたかさがじわじわと、手のひらから心臓まで伝わって、そのまま全身に送られていくみたいに気持ちちが落ち着いていく。

目を閉じて手をひかれるままに足を進めてみた。

このままどこにだつて行けるような気が、僕にはする。

見つからないなって言われて、ようやく僕は探し物をして  
いたということを思い出した。

それ程までにもう、探し物は僕の中でどうでもいいもの  
なっていた。

どうでもいい。もう、失くした物が見つからなくてももう、  
僕は大丈夫だと、そう自然に信じられた。

「だってここには、あなたがいるから」

言ってしまったから、気が付いた。

僕の手を引く人がつんのめるように立ち止まる。

その手のひらが緊張にこわばり、すり抜けてしまう前に僕  
のほうから手を離れた。

自由になった両手をいっばいに伸ばして目の前の人を捕ま  
えた。

ぎゅう、と目の前の人に抱きついて、弾む声で告げた。

「僕が探していたのは、あなただ」

の間にかごわごわとかたい青いものに変わっていた。

それでもこつちの方がよっぽど落ち着く。

額を押し付けたところはその人の肩口で、僕はいつの間  
に  
かもう幼い僕ではない。

肩がむき出しで涼しかった。多分、同じ服を着ているのだ  
ろう。

より強く抱き込んで、首筋に鼻をすり寄せて息を吸い込  
だ。

いつの間にか嗅ぎなれてしまった臭いに、肺の奥底が震え  
るほどに満たされる。

「捕まえた……………」

吐き出した呼吸が、安堵に震えていた。

「……………だめだよ。だってこれはただの夢だ」

腕の中の人が呟く。

「お前の探し物は手に入らない」

その言葉に応じるように、腕の中の感触が薄くなった。

急速にかすんでいくその人に、それでも大丈夫という言葉  
が胸の中で渦を巻く。

どんどん薄くなり消えていきそうな人を安心させたくて、

一度目を閉じて、ゆっくりと開く。

抱きしめた人の衣の柔らかく触り心地の良い生地が、いつ

言った。

いつの間にか僕よりも悲しそうな声を出す人を想って、言った。

「大丈夫ですよ、だって、僕は……………」

「だって僕は……………」

手の届かない高いところに見慣れた天井。見慣れた木の模様がぐるぐる渦を描く。

ぼんやりと呟いた言葉の最後は吐き出されることなく口中に消えた。

夢と現実の境目が見えなくなつて、ぐるぐると巻くその中心を、ぼうつと視線で辿っていた。

目を閉じたら、しゃがみ込む子供と、その背中を撫でる人の影。

夢の端っこを手繰り寄せて、僕は勢いよく布団をはねのけ

て支度を始めた。

いてもたつてもいられなくなつて、すぐさま家を飛び出した。

だって僕は。

僕が。

その続きを消してしまいたくなくて。

だからあなたに、届けに行く。

どこを探しても見つからない。

日もずいぶんと高くなり、焦り始めた頃合いにようやく、見慣れた青ジャージが視界の隅をかすめて僕は声を張った。

「太子！」

振り返った太子の顔が驚いていた。

僕は大腿で距離をつめて、振り返りざまに飛びついた。

太子がそのまま僕に押し倒されてひっくりかえる。

どこか打ち付けたのか痛そうな顔をして、目尻に涙まで滲ませていたけれども、僕は残念なことにこみあげてくる気持ちが大きすぎて、そんな太子を氣遣つてやれない。

僕は太子の腹に乗り上げて、笑いを抑え切れないうまに声を弾ませた。

「つかまえた」

「は？ 何、なになんなの？ ちよ、痛いし重たいんだけど！」

「僕から消えることが出来るわけじゃないですか」

「はあ？」

怪訝そうな顔。そりやそうだろう。全部僕の夢の話なんだから。

全部僕の話で、僕の不安で。でも少しくらい、あの不安や悲しさや辛さのほんのひとかけら。

それくらいは、あんたも持つていてくれてもいいんじゃないかって。

あんただつて少しくらいは不安を、持つているんじゃないかって、思ったから。

いつも振り回されるばかりの僕があんたにそんな顔をさせているというこの現状も、とても楽しくて我慢できそうになかったから。

根拠もなく自分勝手に、言いたい言葉をただぶつけた。

「僕がきちんと、あんたを捕まえていてやるから」

どうだ参つたかと胸を張る。

相変わらず何もわからずに、疑問符を浮かべている顔が本当に間抜けで愉快で笑えてくる。

腹の底が震えるのがこらえられないし、我慢する気も実は、ない。

「はははっ」

「え、ちよ、なに、え？ お芋壊れた？ あのその重たくておなか痛いんだけど」

「知るか、ふざけんな、我慢しろ」

「何この理不尽！」

「っていうかなにこの状況！ お前降りろよ今すぐに！ いやですよ。」

「なんでだよ！？」

「そんな、どうしようもないやり取りもいちいちツボにはいついでにつられるように、涙腺も緩んでもう、どうしようもない。」

「何だ、その、間抜けな顔」

ちよつとだけ。本当にちよつとただけけど、泣きそうだったのには気づかれたかどうか。

ほんの少しだけ滲む視界に、いっぱいにあんたを見ていたくてぐいと顔を近づける。

「ばーか」

「だから！ さつきつからなんだお前ー！！」

しまいにやあることないこと適当に罪状でつち上げて妹子村作るぞ、なんて言いつつ太子が暴れだす。

まだそんなアホなこと考えてたんですか、と心底呆れた声を出す。

それからこの状況をどうしてくれようかとようやく途方に暮れつつ、僕は、太子の文句を心地良く聞いていた。